

報告



第29回 地域産学官と技術士との合同セミナー

(社)日本技術士会北海道支部 事業委員会委員
技術士（建設／応用理学／総合技術監理部門）

五十嵐 敏彦

はじめに

広大な北海道の道都「札幌」は石狩川に面した平野の一角と道外の方からは思われがちだが、近郊には標高1,000mを越える山並みが連なり中心市街地は石狩川の支流の一つ、母なる川「豊平川」の扇状地だ。「札幌」の語源はアイヌ語のサッポロペツで乾いた広大な川を意味し、サッポロとは豊平川そのものを指す。さらに「豊平」とはトイエピラ=崩れた崖を意味し、暴れ川が至る所で河岸を削り取る様子が示されている。

そのような「豊平川」を軸に様々な視点から札幌とのかかわりを概観し、これからの街づくりに活かそうとの狙いを込め今回のセミナー「豊平川とサッポロ」が開催された。

1. セミナーの概要

セミナーは5名の講師陣（行政機関3名、大学研究機関2名）による講演で、治水・利水・環境および都市計画全般から豊平川と札幌のかかわりを論じていただいた（表-1）。

講演は「裏京都」と流布される開拓使以来の札幌の街づくりから始まり、暴れ川と称された「豊平川」の治水事業や、命綱と言える水瓶としての機能面も概観した。さらにサケが遡上・産卵し、市民が憩う都市河川の空間利用も取り上げ「豊平川」の全体像を示した。

本稿ではこの中から、ひととき異彩を放ち会場の注目を集めた佐藤教授の「札幌のまちづくり」と、岡本館長の「豊平川の生物」を中心に、講演の一端を紹介する。

表-1 セミナーの概要

日時：2009年10月2日(金)14:00~17:00
会場：ホテルポールスター札幌（札幌市中央区）
主催：(社)日本技術士会
後援：北海道開発局、札幌市、(社)建設コンサルタンツ協会北海道支部
参加者：118名（技術士・補93名、その他25名）
講演：各30分
①「札幌のまちづくりと豊平川の関わりについて」 北海商科大学教授（北海道大学名誉教授） 佐藤馨一氏
②「豊平川の治水について」 北海道開発局 石狩川開発建設部 札幌河川事務所所長 遠藤友志郎氏
③「上水道と豊平川～豊平川からの恩恵を受けて～」 札幌市 水道局給水部計画課計画係長 技術士・上下水道部門 高屋敷将也氏
④「豊平川の生物について」 (財)札幌市公園緑化協会 札幌市豊平川さけ科学館館長 岡本康寿氏
⑤「豊平川の緑地利用について」 札幌市環境局みどりの推進部みどりの推進課主査 大友雅子氏

2. セミナー報告

(1) 「札幌のまちづくりと豊平川の関わりについて」

札幌は碁盤の目状の街割りと中心となる神社や山・川の配置から、京都を真似た「裏京都」だとする説に対し、氏は札幌周辺の地形図を上下・裏表逆転させ「確かに似てはいる」が誤りであると説く（図-1）。



図-1 上下・裏表逆転の札幌周辺地形図



図-2 ウラジオストクから見た太平洋
(日本列島は行く手を阻む衝立に見える)

なぜなら、「裏京都説」の根拠の一つとされる「北海道神宮と平安神宮の類似性」では、平安神宮の建立が1895年で北海道神宮の1869年より新しく根拠が崩れる。むしろ、明治期初頭までの日本の街づくりは「風水」に強く影響され、都の選定には山を背負い、水を利することが重要であった。そのため豊平川は札幌の防衛上、外堀として位置づけられ、これを往き来する「豊平橋」こそが札幌の中心で、これを拠点とする街づくりが始まった。

明治期以降、西洋文明の流入で都市計画に「風水」が省みられることはないが、分業化が進む現代の技術界には今後、水・都市計画・道路といった全体を見渡す技術者が必要であると力説された。

また、氏の講演では繰り広げられる議論もさることながら、地図を逆にしたウラジオストクから見た日本列島(図-2)など、柔軟でかつ極めて独創的な発想を垣間見て、大きな刺激を得ることができた。これだけでもセミナーに参加した甲斐があったと言えよう。

(2) 「豊平川の治水について」

豊平川は大都市札幌を貫流する急流河川で、市街地が発達する下流扇状地域でも勾配がキツイ。半面、扇端部から最下流域にかけては低平地を流れる緩やかな河川へと様相を変える(図-3)。その河道特性から治水事業なくして札幌の街づくりは成り立たず、開拓期以降、数多くの対策がなされてきた。

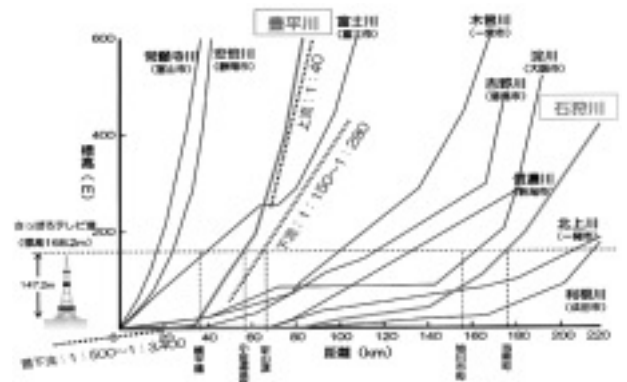


図-3 豊平川の河道特性

り札幌の大きな魅力である。

その環境を守り育てていくためには、弛まぬ努力と事実の積み重ねが重要で、それが市民に受け入れられる確かな技術であると改めて思い起こさせてくれた。

(5) 「豊平川の緑地利用について」

都市部を流れる河川空間は、水辺と緑が織り成すオアシスだ。最近ではエゾシカも訪れる。豊平川の高水敷では昭和42年から「豊平川緑地」として整備が始まり、平成22年度の南大橋付近を最後に全長20.5kmの緑地が完成する。

その間、緑地に関わるそれぞれの想いが交錯し、様々な軋轢も生まれたようだが、現在では延べ20haにおよぶパークゴルフ場などのスポーツ施設と、16haの保全区域が整備され、常時利用している人を含め136万人に達する市民が緑地を訪れていると言う。

今後は地域住民や市民団体、自治体や管理者が一層の連携・協働を進め個性ある川づくりを目指すこととされ、特に豊平川は市内に広がるネットワークの中核に位置づけ、今まで以上に水と緑が一体となったシンボリックな景観を創出することが計画された(図-6)。



図-6 札幌市 緑の基本計画

これを踏まえ、時代の要請に応える意味でも、生態系に配慮したより良い環境が保全されるよう願って止まない。

おわりに

聞くところによると、政権交代劇と相前後して準備された今回のセミナーでは、当初、新幹線の札幌延伸をテーマに掲げていたが、年末の延伸決定を控え、時期的に個別の内容が非常に難しくなるのではとの意見から、テーマの変更を余儀なくされたと言う。

そのような曲折を経て限られた期間の中、改めて札幌の母なる川「豊平川」をテーマに変更し内容的にも充実したセミナーを開催しえたこと、さらに講演の全体を通じ、札幌の今後の発展に技術士が関わりうる雰囲気を醸し出したことは、実行委員会各位の努力と講師陣との綿密な協議によるものであり、改めて敬意を表したい。

惜しむらくは講師として技術士をお誘いしたものの、日程的に止む無くお一人に留まった一方、聴講参加者のほとんどが技術士・補や同業の民間人で偏りがあった(図-7)。

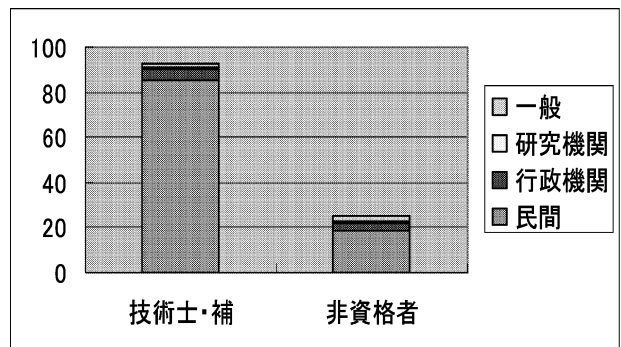


図-7 セミナー参加者の構成

このような背景を踏まえ、地域活性化に向け技術士の活用を図る目的でスタートした産官学セミナーの初心に帰り、今後さらなる工夫が求められるのかもしれない。

(本稿は「PE 11月号」を基に一部を加筆した)